体験版

共有奴隷

鮎川　かほる

　授業の終了を待たず、山村達夫は、校門を出た。これがはじめての無断早退ではない。同級生の母親を自分の女にしている達夫は、若い性欲が爆発的に高まり、性交をしたてたまらなくなったのだ。

　朝から降っていた小雨はすっかりあがり、眩しいばかりの初夏の陽光が路面を射していた。まだ乾ききっていない黒く湿った歩道に達夫の影がリズムを打って色濃く踊っている。最寄の駅まで足早に向かった。黒い革鞄を肩にかつぎながらホームへの階段を一気に駆け上った。プラットホームに出た。そこには川島や藤井など不良グループの連中

がたむろしていた。彼らは、一人の女を取り囲んでいた。年増だがはっとするような美しい女であった。藤色の上品な和服姿で、髪をアップにまとめたうなじの白さが艶やかだ。和服の腰は豊かな曲線を描き、肉づきのよさがわかる。

　丸く張っている年増美人の臀部を川島剛毅が執拗に撫でまわし、なにやら言っている。まわりの不良たちがゲラゲラと卑しく笑った。淫らな冗談でも言ったのだろう。美しい女は顔をもみじ色に染めてうつむいている。その表情が哀艶であった。達夫は近寄り、不良グループの群れに混じった。

「その女は？」

と問うと、藤井拓斗が振り向いてニヤリとした。

「加藤の母親さ」

「加藤って？」

達夫は藤井を見たが、すぐに年増美人に視線をもどした。その女と視線があった。女はすぐに目線を下げた。

「数学の加藤だ」

川島剛毅が尻を撫でまわしているこの女は、数学教師の加藤志織の母親だという。加藤志織は、大学を出たばかりの若い女教師だ。

「こういうことさ」

剛毅は、臀をなでながら女の口を吸った。強引に口を吸われた和服の女は目を閉じたまま眉間をゆがめて耐えている。

　上り電車がブレーキ音をきしませながら入ってきた。口を吸っていた剛毅は、女教師の母親の尻を丸く撫でると、びしっと一つ叩き、電車に押し入れた。不良グループの連中がその後を付き従うように電車に乗る。川島剛毅がボス格ならば、藤井拓斗はナンバー２だ。他に子分の進藤健吾と江川竜輝がへらへら笑いながら乗った。達夫もその後を追って電車に乗った。

　電車内の座席はまばらで空席が目だったが、不良グループは、車両のドア付近に美熟女を取り囲んで立った。

「これからよお、小百合の家でエネマパーティーだぜ。お

前も一緒に来るかい」

川島は、和服の臀部を撫でながら達夫を見た。

「エネマ？」

「ふふふ、浣腸さ。こいつの尻によお、ぶっとい浣腸器を刺して、たっぷりグリセリンジュースを飲ませてやるのさ。これがな、けっこうおもしろいんだぜ。美しい女の苦しむ顔は最高にエロチックさ」

「お前たち、ひどいことをしているんだな」

それは達夫の素直な感想であった。浣腸で女を責めるＳＭプレイの知識は持ち合わせている。しかし目の前の女性を現実にそのような器具を使用して責めるとなると話は別だ。しかも女教師の母親なのだ。

「加藤のママさんはな、後ろを責めてやるといい声でよがるんだぜ。なあ、後ろがいいんだよな」

川島剛毅が藤色の上品な色合いの和服の上から臀部をなでながら、小百合の顔を覗き込む。

「おぞましいだけです･･･」

それはやっと聞き取れるほどの小さな声だった。

「気にいらねえよな」

剛毅が顔を不良学生たちにめぐらせる。藤井拓斗がうなずいた。子分の健吾も竜輝もうなずき、次にはへらへらと笑った。

「今夜だってよお、浣腸したらすぐに濡らすくせによお。上品ぶっているんじゃないぜ。お前は俺たちの牝なんだからな」

この不良グループのナンバー２格の拓斗が小百合のあごに手をかけて顔を上向かせる。恥ずかしげに上気した美しい顔は哀しい色に染まっていた。今にも泣き出しそうなその哀色の表情に達夫の股間が疼いた。

「淫らなことを言えよ！小百合」

剛毅の指が和服の上から臀部の亀裂をぐりぐりと押し込むように嬲っている。小百合は唇をかんだ。

「マゾのくせによお」

拓斗が小百合の胸を和服の上から慣れた手つきで触りだ

す。乗り合わせた乗客の視線などお構いなしだ。健吾と竜輝が威嚇するように乗客を見回すと、誰もが視線を下げて気づかないふりをする。一人の女を取り囲んで卑猥に笑いあう連中はかかわりあってはならない類の者たちだと乗客の誰もが感じていた。

「いっそ、ここで尻まくりをさせようぜ。」

剛毅が後ろを嬲っている手を下げていく。和服の裾をまくり上げようとする仕草に

「言うわ･･･わたし、浣腸･･･好きよ」

小百合は淫らな言葉を吐いた。ゲラゲラと笑い声が響く。小百合の瞳に涙がにじんでいる。達夫の股間がさらに固くなった。悲哀な色を濃くして羞恥に耐え忍ぶ美しい女の被虐の光景に股間は高ぶりを見せるのだ。